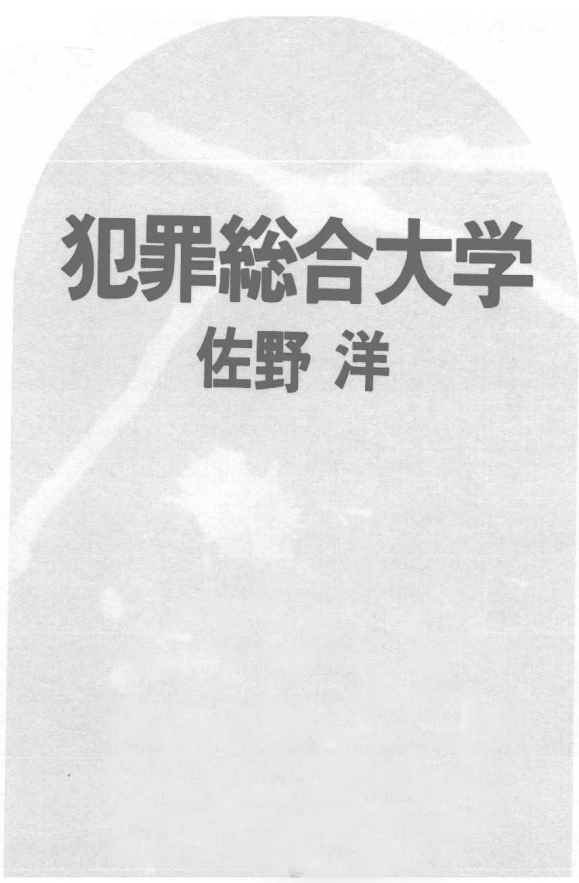


犯罪総合大学

佐野 洋





犯罪総合大学

佐野 洋

犯罪総合大学

定価 980円

第1刷 1980年1月22日

著者 佐野 洋

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111 (大代表) 振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 1980 佐野 洋

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan



目次

文献学的事件

医学的事件

藥学的事件

心理学的事件

生物化学的事件

教育学的事件

207 171 129 89 47 5

装帧
安彦勝博

犯罪総合大学

文献学的事件

このシリーズは、副題についての構想が先にできて生まれた。

つまり、一回ごとに、例えば『物理学的事件』『心理学的事件』『数学的事件』というように、『……学的』な犯罪を取り上げてみたら、と考え、それにふさわしい通しタイトルとして『犯罪総合大学』というシリーズ名がで上がったのである。

ところで、今回は、その第一回だが、実は作者は、副題のつけ方に迷ったのだった。

最初の構想は、応用化学的、あるいは薬学的な犯罪であった。しかし、プロットを練っているうちに、その副題が、必ずしも適当でない形に、小説が発展しそうだった。また、主人公の中に一つの殺意が、どのようにして育って行ったかという面からみれば、社会心理学的犯罪と言えないこともないが、それが最適のものとも思われなかった。

このように迷っているうちに、ふと浮かんできたのが、『文献学的事件』という言葉であった。

第一回の副題としては、少し特殊すぎると思うが、これが、最もこの小説に合っているのではないだろうか。

何しろ、話は、主人公が古本屋である資料を見つけたところから始まり、犯罪の計画もその

資料に基いて検討されるのだから……。

× × × ×

なぜ、あのとき、これを買う気になったのか。大矢清乃は、帰りの電車の中で思った。いや、帰りの電車の中だけでなく、あとになっても、それを不思議な気持ちで思い出すことがあった。

——その日、彼女は、南浦和に住む川辺真之夫妻を訪ねた。

川辺真之は、清乃の父の友人で、彼女が女子大にはいる際、保証人になってくれた。そして、父からの仕送りは、川辺のもとに送られ、清乃は月に一度、川辺夫妻を訪ねて、その仕送りを受け取るようになっていた。

父にしたら、川辺のところに顔を出させることによって、彼に監督をしてもらう、というつもりだったのだろう。

事実、川辺夫人の靖江は、清乃が訪問したあと、必ず、清乃の家に報告の手紙を出しているようであった。

そんな事情を考慮して、清乃は川辺夫妻を訪問するときには、あまり化粧もせず、服装も地味なものにしていた。

父は、清乃を最初に川辺家へ連れて行った際、

『奥さん、少しでも怪しいと思うことがあったら、遠慮なく言って来て下さい。そのときは、首に縄をかけても連れて帰りますから』

と笑った。じょうだんめかしてはいたが、そこには、恐らく、本音も含まれているのだろう、と清乃は考えている。

だから、靖江夫人が、

『このごろ、清乃さんがお化粧が上手になって……』

とでも書いたりすれば、父は様子を見に、飛行機で飛んで来るかもしれない……。

だから、清乃は化粧や服装ばかりではなく、言葉使いや態度などにも、十分に気を使っているのだったが、女の目をごまかすのは、むずかしいのかもしれない。その日、清乃は靖江夫人から、

『清乃さん、恋人ができたんじゃない？』

と聞かれた。

『いいえ、なぜですか？』

清乃は、内心の動揺を隠して聞き返した。

『何と言ったらいいかなあ……。どことなく、ちょっと色っぽくなった感じなの。女は、好きな人できると、色っぽくなるという話だから……』

『そうですか？ そんなこと言われたの初めてです』

清乃は、そう答えたが、腰のあたりがむずがゆい感じがした。

『もし、恋人ができたら、あたくしにも会わせてね。あたくし、やばなことは言わないし、あなたの味方になってあげるから……』

『はい、そのときは、まっさきに、おばさまに紹介します』

と、清乃は平静を装って、笑って見せた。

しかし、本当に、どこかが変って見えたのだろうか……。清乃は、川辺家を辞去して、南浦和の駅に向いながら考えていた。

変って見えるのが当然かもしれない。実際に、七カ月前とでは、自分自身でも驚くほど変ってしまっているのだから……。靖江夫人は、むしろ、その変化に気づくのが、おそかったと言ふべきであろう。七カ月前には、自分が、今のようになるなどとは、考えもしなかった……。

だが、本当のところ、どうなのだろう。いまのままでいいのだろうか？ このまま、流されていたら、取り返しのつかないことになりはしないか……。

そのとき、清乃は、はっとした。首から背にかけて、異様な感覚が走った。

五十メートルぐらい先の八百屋の店先で、赤電話をかけている男が、どうも、永井重介らしいという気がしたので。

永井重介が、こんなところに現われるはずはない。いや、それはわからない。彼は、きょう、清乃が南浦和に来ることを知っているはずだから、彼女を待ち伏せして、彼女が受けとった仕送りの一部を、巻き上げるつもりなのかもしれない。

信じがたいことだが、いや、もともと、人間の脳細胞は、ほんのちよつとの間に、このくらいの判断はするものらしいが、清乃はこんな風に考え、ちよつと目の前にあった古本屋に飛びこんだのであった。

もし、永井重介につかまり、金を貸してくれと言われたら、自分が断れないのを、清乃は知っていた。

仮りに断ったとしたら、重介は、道路に両手を突いて頼むかもしれない。結局は、人目をはばかり、いま受取って来たばかりの仕送りの中から、その三分の一に相当するぐらいのものを重介に渡すことになってしまふであらう。

そんな事態は、やはり避けたかった。

ところが、その男は、永井重介ではなかったようだ。古本屋独特の匂いのする本棚に向いながら、それとなく外の様子をうかがっている、見覚えのあるチェックのブレザーを着た男が、店の前を通り過ぎた。そのブレザーのために、清乃は、先刻、重介ではないかと思ったのだが、店の前を通り去ったのは、重介より十歳ぐらいは年輩の男だった。

清乃は、ほっとして、その古本屋を出ようとした。

そのとき、彼女の目をとらえたのが、問題の資料であった。

別に、目立つように置かれていたのではなく、むしろ、他の本より奥にひっこんだ形でそこにあつたのだが、清乃は、あれっと思った。

ことによると、少しひっこんでいたために、却って、彼女の目を惹いたのかもしれない。

しかし、いずれにせよ、それが以後の彼女に影響を与えたのだから、大げさに言えば、運命

的な出遇いということになるだろう。

裁判記録などによく見られる、白い表紙の仮り綴じの本で、全部で三冊あった。

白い表紙と言ったが、それは、かつて白かっただろうという意味で、実際は、茶と黄の中間ぐらいの色をしていた。

清乃は、その三冊を、本棚から抜き出して手にとってみた。

いずれも、『部外秘』といういかめしい字が、表紙に刷りこまれている。警察庁科学捜査研究所が出した『偽装犯罪に関する研究』の第一巻から第三巻までであった。

第一巻には『自殺の基礎的考察』、第二巻には『偽装犯の解剖とその事件』、第三巻には『外国における偽装犯罪とその事例』という題が、それぞれつけられていた。

清乃は、第一巻を開いてみた。最初のページは、『再刊のことば』となっている。

『本資料は、警察庁発足前に初版を刊行したものであるが、各方面からの要望もあったので、ここに再版を刊行することとした。今回は、誤字を訂正したのと、第二巻が前篇と後篇に分かれていたのを一冊にまとめたほか、第一巻の内容の一部について補正した。しかしながら内容については、なお不備な点も少くないので、今後大方の御批判を得て補正して行きたいと考える。

昭和二十九年九月

警察庁科学捜査研究所長

萩野隆司』

ずいぶん古いもんだな……。清乃は、ちょっと失望しかかった。清乃が誕生する前に出版されたものであった。

しかし、さらに、ページをめくったとき、彼女はいつになく興奮した。ぞくぞくするという表現が、びったりの状態であった。

首つり現場の写真が、グラビヤとして載っていたのだ。『異常な縊死体』という説明がつけられている。

これは貴重品だ。たしかに『部外秘』にするだけの意味はある……。そして、清乃は、これを永井重介が見たら喜ぶだろうな、と考えた。

もとはと言えば、重介らしい男を見かけ、避けるつもりで飛び込んだ本屋である。そこで発見した資料を見ながら、重介のことを考えたのは、矛盾した心理とも言える。だが、彼女の心がそのように動いたのは事実であった。

清乃は、第一巻の裏表紙を調べた。『三巻揃い、二六〇〇〇』の値段が出ている。ちょっと高過ぎる気もしたが、余り出回っていないものなら、そのくらいして当然のようにも思われた。

清乃は、それを買う気になった。一つには、父からの送金を、受取って来たばかりで、現実にその何倍かの金を持っていたためでもあろう。

その代金を払ったら、あとは電車賃が残るだけ、というような状態だったら、いくら貴重な資料だったとしても、購入する気にはならなかっただろう。

ただ、それを古本屋の主人の前に差し出すときは、ちょっと恥ずかしい気がした。『偽装犯罪に関する研究』という本は、一般には、女子大学生に似合わしくないと考えられるだろうか……。

四十前後の、眼鏡をかけた主人も、やはりそう考えたらしい。

『はあ……。大学で、こっち方面のことをご研究で？』

と、無遠慮に、清乃の顔をのぞきこむようにして聞いた。

『いいえ、そうではなく。ある人から、犯罪関係の資料があつたら、買っておいでと言われているもので……』

清乃は、赤くなりながら、少しもって答えた。

そして、そのことで、彼女はあとで自分に腹を立てた。何も、そんなよけいな質問に答える必要はなかったのだ。なぜ、くどくどと弁解じみたことを言ってしまったのか……。

永井重介の本当の職業を、清乃は知らない。

最初遇ったときは、テレビ会社に勤めていると言っていたが、やがて、それが嘘だとわかった。自分から告白したのだった。

清乃は二度目のデートで、重介に肌を許している。いや、デートというのが、ちゃんと予じめ日を指定した上で会うことだとすれば、最初のデートでということになるだろうか。